



Title	研究室だより : 林榮一先生追悼文集
Author(s)	片山, 黎; 金山, 崇; 加藤, 斎之 他
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2005, 29, p. 79-98
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99296
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究室だより

国立大学の独立行政法人化に合わせたわけではありませんが、今年度より新たに『研究室だより』のコーナーを設けることになりました。研究室のこととをよく知っていただくことが主たる目的です。このコーナーは基本的には各々の研究分野のニュースレターという性格のものになりますが、ほかに活動報告なども掲載する予定です。初回である今回は、本学の旧英語学科の主任を長く務められ学科の成長に尽力され、その後学長として大学の発展に大きな貢献をされた故林榮一先生を追悼する文集です。先生にゆかりのある方々にご寄稿いただきました。在りし日の先生のお姿を思い起こしていただければ幸いです。

林榮一先生追悼文集

林 栄一先生への追憶

片 山 黎

昭和23年春、外専英米科一年の我々への先生のTextは、R. L. Stevenson の奇譚短篇 Ollala でした。Direct method でお始めの所、反応余り香しからずとのご判断故か、程なく訳読式になりました。スペイン舞台で residencia, padre, や tatterdimalion 等、当時の我々には珍奇と映り、今も記憶に残る語彙が頻出。又、筋の展開に惹かれ読み進むが終末に達せず時間切れで、残余は独り読了に努め、その後も高校生と再読。印象に残る小品でした。二年度は Jespersen の「文法体系論」で、講義に近い進行で著者独特の術語'Word class', 'Three ranks', 'Junction & nexus'の解説で、六月、外大発足。英語学科一年次は英作文演習で「高瀬舟」。文語の和文英訳に追われる思い強く、先生が intentionally なる副詞を使われた際、こういう時は-ly が落着くのかなと独り思案の記憶。翌二年次は先生の授業はなく前年六月まで同教室の日比野氏によれば、この年六月、先生は「ミシガン大学へ留学する」と颯爽と渡米されたのでした。爾後四年次に二年振り、先生彼の地でご研鑽の構造言語学理論による「教科教育法（英語科）」と後半の「教育実習」でした。卒業の年の夏期単位認定講習で母校へ通う事二週間。京都から日比野氏も参加でしたね。先生の「英語音韻論」で再学習。難解な術語と理論に少しづつ馴染む事を得ました。この期間中のある日、上本町近鉄百貨店で洋書など探書の所、先生偶々お見えになり「伊勢ではどんな工合？ アルコールの付き合いは？ …」と親しく勵まし？ 労り？ の声をかけて頂いたのでした。S.30年フリーズ博士来日、大阪

府高英研へ講演のため来阪の際、林先生が博士の紹介をなさいました。以後久しくご無沙汰。図書係として先生方のご著作を通して牛歩の研修が長く続きました。林先生訳註「英語構造－要点と教材」(大修館英語教育シリーズ)、訳述「言語理論序説」、「日英対照文法論」(文化庁)、「言語学の潮流」(勁草書房)など。又大学で活躍されていた日比野・正保・大喜多の皆様に誘われる様に、中部地区から全国英語教育学会へも参加の機会を得、高校側からの考えを大学の先生方に訴え、聞いて頂くなど多くの先生方からのご指導頂戴致すうち、林先生の学長ご就任の事承り、これを機とし咲耶総会へ出席を心掛け、旧師・旧友にお目通り出来ました事は何にも増して嬉しく、有難く、我が身に活力を与えて頂いたと感じております。お元気な平沢初代元学長先生始め国語の長谷川信好先生、精松源一先生、仏語の畠中敏郎先生からお言葉頂けました。

Last but not least、教員として生を終えた父にならい教職を目指した不肖の私を世に出る仕上げ教育にご薰陶頂いた林栄一先生。今、私は皆様方のお陰で無事定年退職の後、市の国際交流のボランティアの一員として、努力を続けて参る所存であります。いつまでもお見守り下さい。Requiescat in pace.

(大E1回 S28年卒業)

半世紀のご縁に感謝をこめて

金山 崇

1945年（昭和20年）夏の終戦——その翌年の秋に私は初めて先生にお会いした。敗戦と占領の時代を迎えて新しい出発を開始した私の学校では、皆から待望されていた英会話の授業を先生が担当されることになった。東南アジアでの終戦処理任務に就かれたあと引揚げとなり、母校の大坂外語（当時は戦時の呼称のまま大阪外専という）などでお勤めだったようである。

快速電車などない頃で、大阪から神戸の西のはずれの垂水くんだりまで、しかも高丸陸といった戦後の荒廃でバスの便もない丘陵地まで何十分も歩いて通われた。先生の口から淀みなく流れ出る数十分に及ぶ生きた英語に接する週一回の機会を待ち遠しく思った。廊下でつかまえて質問（もちろん英語で）したり、ESSの相談に乗って頂いたりしたし、先生の九大での卒業論文のタイプ打ちによる複写を依頼されたこともあった。

事情あって、定時制高校に勤めながら大学卒業資格を求めて1953年（昭和28年）に外大編入学を認められ私は七年ぶりに林先生の授業を受けた。兵舎を転用した部屋でスタンベックの小説を読んだ。翌年運よくフルブライト留学試験に合格、次の年の夏渡米した行先ミシガン大学は何と林先生がガリオア留学された学校だった。ふしぎなご縁であった。

帰国、卒業、大学院を修了して1961年（昭和36年）外大に奉職。ここで、新しい英語学のために学界で活躍、夙に名を知られていた先生と学問上ののみか職務についても長年にわたってご指導をたまわる身となつた。音声学講義ノートのガリ版切りをほぼ一年間毎週仰せつかつた。有益な楽しい経験であつ

た。当時盛んになった LL (語学演練装置) 授業のお手伝いもした。

大学院で本格的に古い時代の英語に出会い、驚きと強い研究意欲をそぞらっていたが、外大の持つ本来の性格、目的に背馳するとはいわぬまでも少なからぬ摩れのある分野であるだけにその隔たりに苦しみ、埋めようと悩んだ。東大の市河三喜博士の教え子である庭田四郎先生が将来を惜しまれつつ学年の途中で亡くなられたあと、チョーサーの『騎士の物語』の講読を引き継いだが、林先生達の推挙で正式に私が庭田先生の後を承ることになったのが翌年であった。

林先生は寛やかな視点から私のような存在も認め、大切にもして下さった。貴いおみちびきをいくつも頂戴した。生意気で独りよがりに走りがちな私の欠点を暖かく包んで受けとめて下さったと思う。ありがたいことであった。おかげで英語の史的研究のための環境を少しづつでも外大に築いてこれたと言わねばならないだろう。

大学紛争が国中に広がる昭和四十年代、学生部長として日夜激務に当たられ、デモが日常化し、バリケードが築かれ、火炎瓶が飛び交うなど機能不全に陥った大学のため、身を挺しての先生のお働きは若輩であった私達の記憶に未だ新しく、感動を覚える。

先生はこの頃から日英比較に強い関心を寄せられたが、学科主任のほか学内の要職に推された。学内外での与望をになわれて遂に学長職を二期にわたって務め、ご苦労をいろいろなさったことはよく皆の知るところであろう。

ご退職の記念講演を司会させてもらい、言語研究に対する先生の持論を拝聴する私には初めてお会いした頃の日日が思い起こされ、よく見ると心持ち猫背の気味になられたのを除けば、お姿も声の力も何ひとつ変わってはおられなかつた。まだこれからひと働きもふた働きもされるに違いないと強く信じた。

先般、学長交替の記念パーティの席でお会いしたのが最後となった。歩くのが少しご不自由に思われたのが心にかかっていた。いま私の心の目には、上八校舎の正門の桜の下を少し外輪の足取りで入ってこられる先生の若き日のお姿が浮かんでいる。

(大 E4回 S31年卒業)

『ミシガン大学の青春——林 栄一先生——』

加 藤 齊 之

私は昭和29—30年時代、上本町で、林先生の英語学、言語学を、言わば個別的に教えられ、その後の半生を決定された、と深く感謝をしている。フランス語専攻の私が、語学習得を広げ、イタリア、ラテン語、ギリシャ語まで何とか、言語学の中核がソシュール、バイイの仏派から、やがて我が国の有坂秀世の音韻学、米国のブルムフィールドなどのインディアン言語収集を読み、そこから林先生がミシガン大学で研究して帰朝なさったことを知り、八尾市山本の公務員宿舎におたずねした。今考へても、人生の最大の学問的収穫のひとつだと思う。先生は30の半ばか。私も20才だったろう。先生は私のような駆け出しにも、真剣に議論された。3—4時間位語つたかも知れない。先生は、語学の楽しさに満喫、私は何時か海外で勉強したい、と言った。先生は大阪外国语大学の紀要の論文に、献辞付きで下さった。『音韻論』で米国の言語学者、服部四郎、先生の論が述べられて居た。残念ながら、私のそれからの人生が怒濤の如く、先生の論文は私の書棚から失われた。

それからも何回も、英語科教室で先生と話した。一度、本多平八郎先生がタイプを使っておられたが、「君たちは随分レベルの高い話をするね」と言われたのを私は記憶している。英語科の同期学生として金山、大井、小藪、堀江兄にお世話になった。厚く御礼申し上げる。卒業して、宿痾の結核の為、岩手県の親父の実家に帰り、其のうちに岩手大学学芸、教養部の非常勤講師を務めた。国文、英文、仏文の教職員は東大、東教大、東北大卒などだった

が、私に非常に好意的で、外大での勉強が正しかった、と元気づけられた。林先生も何度も文通の時、励まして下さった。その内、言語とかフランス語とか専攻しても、文化低い岩手の大地には、と医学に転換することになった。学生はとても慕ってくれたが、黙って勉強、一年後、北大医学進学課程に合格、林先生には「医学的な言語の発生、脳生理学を将来」と書き、先生は変な奴と思われたが、とても良い手紙を下さった。その後も文通が続く。北大では東大卒川端香男里、外川繼男などと仲良しになった。

医師となり、医局から米国のピツツバーグ大学病院でレジデント——臨床医師——になった。二年目、夏休暇で、ビートルで中西部旅行した。デトロイトの周辺都市、アンネバーがあり、ミシガン大がある。金山兄はたしか留学された筈。北大の同級生が大学病院のレジデントだったので、案内した。デトロイト近くのホテルに泊まった。気品のある大学生街の繁華、美しい、緑濃い森のなかに点在する学舎、寄宿舎。たしかに林先生は大いに学び、その余暇は学生たちとビール、濃いアップルジュース、カナディアンメープル、ハンバーグ、旨いステーキを召し上がったに違いない。戦後の混乱の日本を出て、人生の最良の時ではなかったか。私も米国留学が最良だったと思う。私は六年、レジデント、フェロー、講師として米国に滞在し、帰国、医大教職につき、それから開業、娘は歯科医師、息子たちは医師となり、科学の路をそれぞれ歩むだろう。林先生が米国への学問の憧れを私に植え付けられた。これには感謝、感謝である。

(大 F 4回 S31年卒業)

林榮一先生を偲んで

西 光 義 弘

1960年代半ばの高校生時代に英語学を勉強しようと決めたが、どの大学に行くかを決めるに当たってまず地元の広島大学の英文科を考えた。広島大学には当時棚井教授がおられた。棚井教授の『ロンドン英語の響き』という本を読んでいたこともあって、広島大学もいいなと思っていたのであるが、広島大学の英文科に行った高校のESSの先輩に卒論の一覧が載っている広報誌を見せてもらうとすべてが文学に関するものだったので、これでは英語学の勉強はそんなにできないのではないかと思った。そこで母の姉が在住している大阪を考え、実用的な英語力を身につけたいということもあり、また林榮一先生の訳述したイエルムスレウの『言語理論序説』が『英語青年』にのっていた『英語学ライブラリー』の宣伝に出ていたのを見て、この先生がいる大阪外大を受けてみようと思ったのである。もちろんグロセマティックスというものがどんなものであるかはぜんぜん知らなかったのであるが。というわけで二期校であった大阪外大の英語学科の入試のみを受け、無事入学したのであった。入学式の日に林先生の姿を見、この先生の指導を仰ごうと決めた時のことは今も鮮明に覚えている。

特に最初の頃は英語学を研究するということはどんな意味があるのだろうと悩み、林先生に相談することもあった。その後は後輩を集めて研究会をつくることに熱中したが、そのようなわたしをたぶん温かい目で見ていただいていたのではないかと思う今日この頃である。

大学院修士課程を終える時には林先生と寺村先生には特にお世話になり、ある大学に決まりそうになったが、結局だめになり、非常勤の手配をしていただいたりして、暫くは非常勤で暮らしていこうと思っていた矢先に、神戸大学で人を探しているということを林先生に教えていただいて応募したのであった。そこで林先生の九州大学での後輩である筧壽雄先生に会い、神戸大学での英語学・言語学の体制を整えていったのである。

その間当初大阪外大言語学研究会として発足した会が、関西地区全体の学会として発展するに当たっては林先生の交友と人脈が大きな力を発揮したことは言うまでもない。関西言語学会での林榮一先生のあいさつをもはや聞くことはできないが、その精神は関西言語学会が続く限り受け継がれるものと信じるものである。すなわちなるべく小規模の顔の見え、親しみの持てる研究の交流である。

(大E18回 S45年卒業)

林栄一先生を偲んで —大阪外国語大学とのご縁—

松 田 武

もう三十年も昔のことになってしましましたが、当時私は、アメリカ合衆国ウィスコンシン州立大学の大学院でアメリカ史を学んでおりました。そこへ林栄一先生が一通のお手紙を下さいまして、私に「大阪外国語大学の英語学科へ就職しませんか」とお説いてくださいました。その頃も現在と同じく、大学への就職は狭き門で、先輩のオーバードクターが職探しに走り回っておられますのを目の当たりにしていました。まだ学生の私に、このようなお説いて頂いてあり難いと心底思いましたが、今就職しますと、大学院での勉強が途中になってしまいますこと、ウィスコンシン大学で博士の学位を取りたいと思っていますことなど、迷います材料も多く、それらを全て包み隠さず、林栄一先生にご相談いたしました。林先生は、そのように迷っている私に対して、就職をしても学業が続けられる方法などを親身になって考えられ、あれこれアドバイスをしてくださいました。そのやりとりの中で、「この先生の下でなら、勉強も続けられる・・・」との思いが強くなりまして、林栄一先生の大きなお心に飛び込むような形で、大阪外国語大学に就職させていただきました。

就職いたしましてからは、「松田君、コマ数の少ない助手や講師の時に勉強しとかないと・・・」と、折りにふれていってくださいました。林先生のお言葉に添えますようにと、私なりに実践してきましたが、この年になりました

た今、若いときに良いアドバイスをいただけてよかったです、林先生のお言葉は正しかったと、大変感謝しております。

目をつむりますと、長年に亘り英語学科主任として、さらに大阪外国語大学学長として、大学の発展のためにその御手腕を大いに振っておられました林栄一先生のお姿が、目に浮かんでまいります。

本当にながきに亘りお世話くださいまして有難うございました。心よりお礼申し上げます。謹んで林栄一先生の安らかなご冥福をお祈り申し上げます。
合掌。

(大 E18回 S45年卒業)

林先生のこと

杉 本 孝 司

以下の内容には以前にも書いたことが含まれているのですが、林先生のことを懐かしく想い出しているとやはり同じようなことが頭の中を巡りますので、重複部分が多いとは知りつつも、更に多くの EDU 会員の方々と思い出を共有する意味も込めて、ここに書かせて頂いています。1967年春、私はとてもフレッシュな（？）大阪外大英語科1年生となりました。もともと高校時代から言語学には興味があり、1年次の林先生の音声学の授業はとても楽しみにしていました。「大学のエライ先生」だからさぞかし近寄りがたいオーラがあるのでは、などと思っていましたが、授業が始まるとすぐに判明したことは、みなさんもよくご存じの通り、とても人なつっこい、というか大阪のオッチャンっぽい、私たち学生にとってはとても親しみのもてる先生でした。授業の語りも標準語とは一味も二味もちがう大阪弁（あれは河内弁だったのか？）で、特に私自身が大阪の人間だったからかもしれません、何の違和感もなく1年生の頃から先生とは親しくお話しさせて頂くことになりました。林先生は英語学がご専門でしたが、シェークスピアの授業も担当していました。私の出た授業ではたまたま喜劇が取り上げられていたから余計そうだったのかもしれませんせんが、少々きわどい内容も含めて先生のお話は実におもしろく、またシェークスピア劇の台詞がどんどん大阪弁で訳されたり、と1時間の授業で何度も学生たちの笑いを誘うそんな授業の連続でした。英語と日本語をひっかけた駄洒落に大笑いした人も数多くいらっしゃ

ることと思います。学生との間に隔たりを感じさせない先生の気さくなご性格を語るエピソードは数限りなくあると思いますが、ある日、先生に「すぐ近所に下宿しているS君の所へ行きましょう」とお誘いすると「よっしゃ！」と快諾して下さり、そのS君の所でコーヒーを飲みながら何時間もお話をしたことなど懐かしく想い出されます。私が学生時代、先生の研究室に何かでおじやましたおり、先生がカップラーメンか何かを立ち食いされていたことがありました。!!!!?と思ったのですが、先生は「もう忙しゅうてな～、昼飯も食つとられん」とのこと、教職についた今にして初めてその時の先生のお言葉の意味が分かり、授業以外にも膨大な仕事をお抱えの中、よくあれだけ私たち学生の相手をして下さった、と感謝の念が絶えません。またEDUの多くの方々はご存じないことかもしれません、先生は、関西の英語学・言語学を活気づける意味も込めて、関西言語学会という組織を70年代には立ち上げられ、お亡くなりになるまで会長としてご活躍下さいました。この学会も今や全国規模にまで成長し、学会の運営はもとより英語学・言語学の分野で全国的に活躍している研究者の中にも林門下生が多いことは特筆すべきことだと思います。かく言う私も現在大阪外大で英語学の教鞭をとっており、これもひとえに先生の学恩のおかげと深く感謝しております。その後、外大の学長職までこなされた先生の教育・研究・行政に対する情熱と前向きの姿勢を少しでも今後の私の教師としての外大生活に活かさせて頂ければと思っております。

(大E19回 S46年卒業)

林先生のこと

斎 藤 隆 文

林先生には学生時代にご指導を受けて以来、いろいろお世話になりました。とはいっても、先生のゼミに出たとか、あるいは先生と飲みにいったというようなことは、ほとんどありませんでした。おそらく言語関係の方々はそういうことも多々あったかも知れませんが、私個人としては、先生はただ畏敬の対象であったと思います。

おそらく先生に指導を受けた人はたいてい同じ事を言われると思いますが、とにかく先生はおもしろいことを授業中に言う方でした。そのおもしろい内容については、私が覚えている先生のジョークと他の方の覚えているジョークとが違うという点からも、おそらくその数たるやかなりのものだったのではないかでしょうか。しかしポイントは、そのジョークは能天気な先生が学生を喜ばすために言うような性質のものとは少し違っていたということです。というのも先生はジョークを言うときでも決してすきをみせなかつたからです。学生がジョークに乘じて悪乗りをするような雰囲気は決してなかつたわけです。そのためかどうか先生のおだやかな笑顔やそのジョークにもかかわらず、先生は真剣勝負に生きる武士の如き方だったように思います。先生と廊下をすれ違うときのかすかな緊張感は思えばそのためだったのでしょうか。

しかしながら先生のそのおだやかさの底にある気迫のようなものは全て研究とそしてとりわけ、学生への指導に向けられていたように思います。なにしろ先生の学生をやる気にさせる力は半端なものではなかつたのではないか

しょうか。それは先生の指導を受けて現在活躍されている方々を思えばすぐにわかることです。こういう稀な先生に外大生が学ぶことが出来たということは幸せなことであったと思います。

(大 E21回 S48年卒業)

林先生の御恩

竹田津 進

英語科の卒業生で私ほど先生にお世話になり、ご迷惑をかけた学生はほかにはいなかつたのではなかろうかといつも忸怩たる思いがあります。もう三十年も昔、初めて先生に身近に接したのは顧問をしておられた柔道部の新入生歓迎コンパの時でした。「得意技は内股でね。五年程前までは学生といっしょにやつとったんだよ」というようなお話をされたので、大学教授でも学生と柔道を取られるのかと驚いた記憶があります。(先生の腕前は式段と伺っていました。) またその年の追い出しコンパの席でのこと。部員一人一人に酒を注いで回られ、私の番が来ました。先生はにこにこしながら「(音声学は)欠点やぞ」とおっしゃられたので、思わず「えっー」と叫ぶと、隣の先輩から「ばーか、冗談やがな」とからかわれる始末。茶目っ気のある先生でもありました。

柔道部での四年間、時折対外試合の観戦に来られたこと、あれだけお忙しい身で、殆ど欠かされることなくコンパに出席され、授業の時とはまた違ったお話を聞かせていただいたこと、またいろいろ御相談にのっていただいたことなどが今はなつかしく、現在柔道部の幽霊顧問に成り下がってしまった自分を省みるにつけ、先生にはただ頭が下がる思いです。

四年が過ぎた時、卒論だけを残して、若気の至りで鉄砲玉のようにアメリカへ飛び出し、レストランで皿洗いをしながら大学に通うという文字どおりの苦学を体験しました。大学のゼミレポートに加筆修正した卒論を、それま

でまったく御無沙汰していた先生に唐突に提出したのは二年経った頃でした。さぞ先生は当惑され、閉口されたのではなかったでしょうか。しかしそのことはおくびにも出されず、（その卒論は事務的理由で没になりましたが、）滋味あふれる言葉で論されました。翌年別のテーマで論文を書き直し、今度はちゃんと連絡を取ってから提出し、国際電話でしていただこうと思っていた卒論試問もなく、七年目での卒業がかないました。休学中の諸手続きも怠りがちなうえ、卒論試問もなしに卒業できたのは、まったくもって林先生のおかげというしかありません。

言語学の修士を取得し凱旋気分で帰国した二月頃、早速先生に御挨拶に伺ったところ、「アメリカのマスターなら掃いて捨てるほどおるからな」と厳しいお言葉。ぎやふんとなると、「○△高校ならあるんだがね」と、ある有名私立高校への就職の話を切り出されました。「（大学の）非常勤だけでやっていくのはみじめやぞ」とも言われ、親身に考えていただいていることをひしひしと感じました。ありがたいお勧めとは思いましたが、研究を続けたい気持ちもあったのでお断りさせていただき、一年浪人して外大の院に進みました。この浪人中にも、不面目にもせっかくの別の就職口を私の不手際でふいにしたことがありました。院の一年目が終わろうとする頃、先生とは全く無関係のところからたまたま別口があり、御相談するとお薦めの言葉もあって、アメリカ流に割り切って決めてしまいました。あくまで私の一存による決断でしたが、仄聞したところでは、そのことが誤解を生み、あとで先生に多大な御迷惑をおかけしてしまったとのこと。生前お詫びできなかったのが心残りです。

白帯から始めて四年間続けた柔道のせいではなかったでしょうが、先生にはことのほか気にかけていただいた気がしています。恩着せがましいことなど一言もなく、そういう先生の御恩に対する感謝の念を忘れたことはありません。

(大 E26回 S53年卒業)